

災を経て、さまざまな繋がりに「感謝」する事こそ大事だと思うようになった。

建物をはじめ作ったものは壊れる。後世につなげられるものは気持であり、伝統や文化、日本人としての伝統的な意識を伝えることだと思う。それは命を伝えることでもある。震災後は、先祖や自然や、人と人とのつながりに感謝して生きてきた人達のおかげで、今の自分があるということを明確に自覚できた。先人達はもちろん親や先生にも感謝することは、地に足付いて物事に取り組む時に大事なことだと思う。武道は特にメンタリティーが大切であるし、前に進むということは、自分自身の深みを知ることでもある。物事に感謝するスタンスがあってはじめて物を大事にする思いが生まれ、その心は環境を守る活動にもつながっていく。

## 振り返って思うこと

本来感謝すべきものに感謝しなかった、見るべきものを見てこなかった。気がつく機会はこれまでに何回もあったのに、気がつかなかった人の愚かさ目目の前の欲に気を取られる欲深さは常に反省しなければいけない。よっぽどの機会がなければこうしたことを振り返れない人の愚かさを自分に

感じた。油断や奢りは自身でなかなか律することはできないが、律するために真摯に取り組んできた方々が先輩にいて、命が紡がれてきたのだと感じる。武道の世界でも先輩方、先人達が教えを守ってきたから、この伝統的な文化が伝えられてきた。その恩恵にあずかっている我々が、学びとして活かしていない部分が多い。それは明らかに奢りであり油断であり横柄さであり、これらをいかに律するかを日々生活の中で反省し、日々感謝する心を持ちたいと思っている。



撮影：2011.7.15 山元町

大学

仙台市

## 1人ひとりの死が1万数千件あった災害。 失われたのは普通の地域の普通の人々の営み。

新妻 弘明 東北大学大学院環境研究科 教授

取材日 2012.3.12

日本地熱学会会長、国際地熱協会理事等を歴任。2002年からエネルギーの地産地消である概念「EIMY (Energy In My Yard)」を提唱し、岩手・宮城・福島・長野等で実現に向けた実践研究に取り組んでいる。震災後に発刊した著書「地産地消のエネルギー」では、実践例を交えながら自然エネルギーを地域レベルで活用していく方法を説いている。

大学

## 3月11日 14時46分

研究室にいた時、スピーカーから緊急地震速報が流れてきた。宮城県沖地震を経験していたが、それより長く大きな地震だと感じた。自分のデスクの下に身を隠しながら3度の大きな揺れを感じた。いつもなら揺れが落ち着く頃に長い揺れが何回か発生し、2回目、3回目の揺れで次々と大きな本棚は倒れた。振幅が1mほどあったように思う。「確率99%で起こるといわれていた宮城県沖地震は終わったな」とほっとした思いがした。その時点で津波の知らせはもちろん知らなかった。その後、避難場所となっているテニスコートへ避



難した。全員の安全確認を行い、けが人がいないことを確認した。大学本部からの解散指示が来るのを待っている時、学生がワンセグで「こんな状況になっています」と津波の状況を教えてくれた。近くにいた留学生はしゃがみ込み、恐怖心で震えていたのを覚えている。自宅は八木山にあったが、帰路にある八木山橋の倒壊の恐れがあったため、大学に車を置いて迂回しながら歩き、50分ほどかかり自宅に戻ることができた。

## ライフライン

電気、ガス、水道が止まった。自分の予備知識として、以前の経験からだ水道、電気は3~4日、ガスは1ヶ月くらいで復旧するという思いが頭にあった。電気は3日目くらいに復旧したが、今回は水道が復旧するまで3週間もかかってしまった。これは宮城県を南北につなぐ広域水道の基幹ラインの破損によるものだった。このような状況にあって、我々に本当に必要なものは、水と食べ物と熱であることを実感した。自宅での飲み水は市の給水に頼り、生活用水には自宅裏の小さな沢水を利用した。熱は薪ストーブが大活躍した。薪の蓄えがあったので、暖房のほか料理や湯沸しにも使うことができた。停電の暗闇の中で薪ストーブの炎に大いに心を癒された。自分で収集したエネルギーを自分で使えるということは、何物にも代えがたいものがあった。常日頃、自分で自給している強みがでたと思う。

大地震の後はお金が全く役に立たない世界だった。沢の水を運んでいる時、ふと、「昔はこのようなことはごく当たり前だったのだ」と思った。大変だけれども、これはこれでやりがいも出てくる。蛇口をひねるだけで水が出てくる世界はなんと便利なのだろう。だがそれは、食べることも嘔吐することも不要な点滴を受けているようなものではないかと思った。我々は、点滴が止まれば生きていけないような社会に住んでいるのではないだろうか。

## 被災地へ支援物資を

情報収集を兼ね、東北大学の学生支援組織HARUに寄せられた支援物資を被災地に届けに行った。多くの方々から頂いた支援物資と、仙台朝市商店街振興組合から提供していただいた4箱分の果物と野菜を積んで行った。

数100人規模の避難所が対象では物資に限られていること、個人規模の避難者には避難所と同等に支援がされていないことを聞き、大きな避難所ではなく、小規模な避難所へ届けた。また、役所や避難所という組織を通してではなく、被災者に直接物資を届け、顔を見て話を聞くことで、被災

地の実状や被災者の心に直接触れたいとの思いもあった。

特にあてがあった訳ではないが、6箇所支援物資を直接届けることができた。最初は怪訝そうな顔をされたが、東北大学と言うと少し安心し、果物を持って来たことを告げると他の物資まで喜んで受け取っていただける。こうした反応の連続だった。仙台で我々が経験したように、果物や繊維質を欲しいと思う頃であったため、果物の提供は大変喜ばれた。一般に行き渡っているとされていた下着や衣類等も喜んで受け取ってもらえた。統計的には充足していても個人単位では過不足があり、個人に合ったものが無い実状を学んだ。同時に全国から送られてくる膨大な量の支援物資を、個人レベルまでおろすことの難しさを感じた。送られてきた支援物資の箱1つひとつを見ると、それぞれに心がこもっている。このお志しを直接被災者に伝えることができない現状に複雑な気持ちでいたが、今回、直接被災者に手渡し、別な形で支援者の心をお伝えできたことは幸せに思う。一番得な役をやらせていただいたことになり恐縮するとともに、関わってくださった多くの方に感謝したい。現地では、津波の直前に金華山と牡鹿半島が陸続きになり、それから海が盛り上がりかなりの時間そのまま動かなかったという貴重な証言を得ることができた。現地の実状を知るとともに、情報収集に関しても大いに勉強になった。

## 震災の振りかえり

この度の震災では、普段マスコミや学界で注目されることがない、普通の地域の普通の人々の普通の営みが失われた。そして、その時起こった社会現象から、我々は社会の大多数を占めるこの普通の地域の普通の人々の普通の営みの大切さ、尊さを思い知らされると同時に、世間で耳目を集める事象だけで物事を考えてきたことを深く反省させられた。また、世の中は統計量だけで物事を考えてはいけないことを思い知った。

震災で1万数千の死者が出たのではなく、1人ひとりの死が1万数千件あったのであり、その1人ひとりの死にそれぞれの思いと悲しみがあつたことを忘れてはならない。また、被災地の状況や人々の心は場所によってそれぞれであり、支援や復興は決してそれらをひとくくりにして考えてはいけない。被災者の避難先の確保にしても、「全体として数が足りていればよい」との認識が全く通用しなかったことも、このことを表している。それぞれの地域のそれぞれの生活には、それぞれの事情と思いがあり、その事情と思いはそれぞれの地域の歴史と風土に根ざしている。このような人々の営みは、植物と同じように、移植すれば済む話で

はない。

単に被災地の復興や社会体制・防災体制の変革、我が国や社会の再興を促すだけでなく、エネルギー多消費型文明、効率優先社会、そして巨大な人口システムに相互依存した文明に対して大きな警鐘を鳴らしたものと考えべきだ。

震災を機に、持続可能な環境共生型の文明社会に転換するのか、あるいはこれまでの文明の延長をばく進するのか、重大な岐路にあると思う。

未曾有の被害をもたらした災害が、我々に何を教えようとしているのかを、立場を超えて真摯に考えるべきであり、この時代の節目にあつて、我々が震災に何を学び、どうアクションを起こしたかは、これからの1,000年の行方を決めることになるだろう。1人ひとりに何ができるかを考えた時、自分で学び続ける以外に道はない。自分にできることは少ないが、地域を見つめて自分に何ができ

るのかを考え、地域の1人ひとりがどう動いていくかが重要だ。



撮影：2011.8.5 桂島

## 個人

# 停電状態の中唯一生き残ったメディアとしての責任感。

仙台市

板橋 恵子 ラジオパーソナリティー、企画・制作プロデューサー

取材日 2012.3.30

Datefm (エフエム仙台) で長年にわたり番組の制作に携わる。2004年から想定宮城県沖地震への備えとして防災啓発番組を制作。2008年には身近な環境キャンペーンの必要性を感じ、緑豊かな宮城の自然を守る「ForeverGreen」キャンペーンを展開。2012年からフリーとなり番組制作やイベントの企画制作を手掛ける。仙台市復興検討委員会委員として復興計画策定に関わった。

## 3月11日14時46分

いつもよりも遅い昼食から戻り、歯を磨いて3階の化粧室を出たところで、突き上げるような激しい揺れが起きた。廊下の壁に両手をついて、立ったまま必死で揺れに耐えた。「ああ、ついに、想定宮城県沖地震が起きた…!」と思った。まさに、宮城県沖地震の再来に備えて、7年前に立ち上げた防災啓発番組の中で、「地震の揺れは1分程度で収まります。落ち着いて行動しましょう。」と、再三呼び掛けてきた。1分耐えれば…。しかし、激しい揺れは、1分では収まらなかった。一瞬の間をおいて、また揺れ始めた。そして、さらに1分…。のちに判明するが、3つのプレートが次々と割れたために、3分以上にわたって激震が続いた。以前外国人留学生にインタビューした際、生まれて初めて地震を体験したときの状況を、「大きな怪物が、自分の住んでいるアパートを持ち上げて、揺らしている」ように感じたと話していたことが頭をかすめた。まさに、巨大な力で、ビル



をまるごと、完膚なきまで揺らされ続けている…、「この世の終わり」を意識した。

揺れがおさまった後、がくがくする足で、壁に両手をつきながら、一段一段確かめるように階段を降りて、2階のニュース室に向かう。定禅寺通りのサテライトスタジオからの生放送は、停電で一